

古民家ゲストハウスにおける宿泊者の行動と会話内容

——人々の交流状況に着目して——

松 原 小夜子*

Behavior and Conversation of the Guests in Old Japanese-style Guest Houses

—Focusing on the Interaction with Others—

Sayoko MATSUBARA

1. はじめに

1.1 宿泊型ゲストハウスの特徴

近年、日本において「ゲストハウス」と呼ばれる簡易な宿泊施設が増加している。ゲストハウスは 旅館業法上、簡易宿所に分類される宿で、①素泊まりを基本とし、②ドミトリーと呼ばれる相部屋形式が主で、③台所や居間など何らかの共用空間を有し、④素泊まり・相部屋であることから、宿泊費が安価である、などを特徴としている。トイレや洗面、浴室などは共用で、浴室はシャワーのみの場合が多い。寝具の準備や食事の支度、片付けなど、身の回りのことは自ら行う方式である。

旅館や民宿では、1泊2食付を基本としており、部屋単位の料金であるため、家族連れやグループでの利用が有利であるが、相部屋形式のゲストハウスでは、一人でも同一価格で宿泊できる。台所や居間など共用空間での食事づくりやくつろぎ時、あるいは近所の銭湯や温泉施設利用時などに、宿泊者同士の交流が生まれやすいこともあり、一人旅でも気軽に利用することができる。

1.2 関連する研究

こういったゲストハウスは、学問的にも様々な方面から注目されており、観光学、地理学、心理学、都市計画学、建築学などの分野で、近年、研究が行われつつある。まずは、ゲストハウスの概要を把握した研究として、石川と山村（2014）は、全国100軒の宿主にアンケート調査を行い、開業年や経営形態、宿泊料金などを捉えている。また、松原（2016）は、ゲストハウスに関する多彩な研究の一層の発展のためにも、全国的なゲストハウスの軒数や開業時期といった基本的な実態把握が必要であるとの考えから、現時点での、ゲストハウス軒数、開業時期と動向、建物種別、古民家ゲストハウス軒数などを、で

* 生活科学部 生活環境デザイン学科

きるだけ正確に把握しようとしている。

次に、宿泊者等の交流機能に着目した研究がある。片桐ほか（2015）は、東京都内の事例で聞き取り調査を行い、宿泊者と非宿泊者の交流の状況を捉え、ゲストハウスが、着地型観光のゆるやかな人材育成の場となり得ることを指摘し、石川（2012）は、長野県の実例において、宿のイベントおよび地域の人々の集まりに関する参与観察調査を行い、ゲストハウスが、旅行者を含め、地域社会にかかわる多様な人々の交流の場としての役割も担っていることを指摘している。林と藤原（2012）は、見知らぬ他者との交流を目的とした旅行を「交流型ツーリズム」と名付け、国内各地のゲストハウスにおける参与観察と、オーナー等への聞き取り調査をもとに考察し、交流型ツーリズムが、自己の発見と統合の過程の繰り返しによって、自己実現をうながす可能性があることを指摘している。

さらに、地域との関連やまちづくりへの寄与に着目した研究がある。澤田と岡（2012）は、関西4都市に立地するゲストハウス経営者へのアンケート調査と、5軒の実例での観察調査等から、経営者は、まちづくりに関心を持つ人が多く、ゲストハウス開業は、まちを活性化する効果を持ち、住民からも期待されていることを指摘し、小林と森永（2015）は、併設施設が有る、またはイベントが開催されている場合を「地域に開かれたゲストハウス」と定義し、典型4事例を選定して聞き取り調査を行い、ゲストハウスは、多様な人々に開かれ地域文化を体感できる「まちの宿」としての役割を持っていると考察し、長田ほか（2015）は、11事例のゲストハウスへの聞き取り調査と観察調査から、素泊まり・シャワーのみといった宿の形式が、結果として周辺店舗との連携を生んでいることを捉えている。

1.3 本研究の目的

これらの研究からは、ゲストハウスが、安価な宿というに留まらず、宿泊者や地域の人といった宿に関わる人々の交流を生み、地域を活性化する可能性もあるなど、注目に値する存在であることが読み取れるが、いずれの研究も、少数の宿泊者等への聞き取り調査をもとにした結果と考察である。交流の状況や地域活性化とのかかわりに関する研究を深めるにあたっては、より多くの利用者の行動や意識を捉える必要があるといえる。

一方、ゲストハウスは、既存の建物を利用して開業される場合が多いことから、各地に残る農家や町家などの古民家を利用する事例もある。古民家を利用したゲストハウスに宿泊して、食事やくつろぎ、就寝などの生活行為を行うことは、日本の伝統的な住文化や生活文化の一端を体験することになり、それらの再評価につながる可能性があることも推察される。しかしながら、こういった古民家利用ゲストハウスに関する暮らし方の観点（住居学的観点）からの研究は、現在のところ行われていない。

そこでこの研究では、ゲストハウスの交流機能、地域とのかかわり、古民家利用の3つに焦点をあて、古民家利用ゲストハウスを対象として、宿泊者同士の交流状況、宿泊者と地域の人々との交流状況、周辺地域および古民家への宿泊者の意識などを捉えることを目的とする。これらのうち、本稿では、宿泊者同士および、宿泊者と地域の人々との交流状況に着目し、宿泊者の実際の行動と会話内容について報告したい。

2. 方 法

2.1 調査対象の抽出

本研究では、ゲストハウスの定義を、①素泊まりを基本としている、②ドミトリーと呼ばれる相部屋がある、③トイレや洗面、シャワー等が共用で、台所や居間など何らかの共用空間がある、の3つとしている。なお、宿によって、様々なタイプが存在するが、別報でも述べたように(松原2016)、抽出にあたっては、①素泊まりを基本としつつ、朝食のみ選択可能な「B&B」方式や、朝夕2食を選択可能なもの、②ドミトリー形式以外に、個室を選択できるものは含めた。

また、古民家の定義は、「日本の伝統的な建築様式を有しているもので、昭和25年以前に建築された建物(築65年以上)」とした。これは、昭和25年11月に、建築基準法が施行されていることから、それ以降の建物は、近代的な工法の影響を受けている可能性があると考えたためである。古民家の建物種別は、住宅については、「農家」、「町家」、農家形式以外の「戸建」の3つに区分した。なお、住宅以外の建物を利用したもの(元旅館や蔵など)も、「他建築」として含めた。

こういった古民家ゲストハウスの把握をもとに、「農家」、「町家」、農家形式以外の「戸建」、住宅以外の「他建築」といった建物形式と、宿が立地する地域の特性に着目して、対象事例を以下のように抽出した。

農家では、限界集落になりつつある地域に立地するゲストハウスK、都市中心部から車で10分程度であるが、集落自体の人口は極めて少ない山村集落に立地するゲストハウスH、観光地に近接しながら、活用されずに放置されていた農家型邸宅と離れを用いたゲストハウスIの3軒を抽出した。なお、ゲストハウスHは、朝夕の食事が選択でき、繁忙期以外は個室利用を前提とするなど、民宿的な性質を有している宿であることが特徴である。町家では、宿場町に立地する伝統的な町家を用いたゲストハウスTを、戸建住宅では、歴史的都市の観光地に立地するゲストハウスJとYを、住宅以外の建築では、観光地に近接して立地する伝統的建築物を用いたゲストハウスMとDを、各々抽出した。

2.2 調査の方法

調査の方法は、以下の通りである。

オーナーへの聞き取り調査：上記のゲストハウスを訪問して、オーナーへの聞き取り調査を行った。調査時期は、2015年2月～7月である。主な聞き取り項目は、建物の特徴、オーナー属性、開業趣旨や経緯、宿泊者・利用者の状況などである。

宿泊者等の行動観察調査：上記のゲストハウスに宿泊して、宿泊者の数や属性、宿泊以外の来訪者数などを可能な範囲で捉えた。また、宿泊者およびスタッフの行動及び会話について観察調査を行い、主な部屋別に、30分ごとに、宿泊者やスタッフの行動と会話内容を記録した。行動では、調理、食事、くつろぎ、会話、入浴、就寝などの項目を設定し、会話内容では、食事処や見どころなどの観光情報、旅の話、仕事、学業、家庭、趣味などの項目を設定した。

調査時期は、いずれも2015年であり、ゲストハウスK：8月10日～12日、9月21日～23日の計4泊6日、ゲストハウスH：8月19日～20日、10月16日～18日、10月24日～

25日の計4泊7日、ゲストハウスI：8月14日～8月16日、9月3日～9月5日、9月20日～9月22日の計6泊9日、ゲストハウスT：8月21日～23日、9月17日～19日の計4泊6日、ゲストハウスJ：8月28日～29日、9月15日～17日、10月2日～4日の計5泊8日、ゲストハウスY：9月22日～24日の計2泊3日、ゲストハウスM：8月19日～22日の計3泊4日、ゲストハウスD：9月22日～24日の計2泊3日である。

宿泊者へのアンケート調査：上記ゲストハウスの宿泊者にアンケートを依頼し、回収を行った。回収数は、ゲストハウスK：59、同H：71、同I：15、同T：45、同J&Y：16&14（計30）、同M&D：11&21（計32）の合計252票、実施時期は、2015年7月下旬から10月末である。アンケート項目のうち、本稿に関連する項目は、回答者の属性、ゲストハウス利用状況と評価、宿泊者や地域の人との交流と評価などである。

3. 結果と考察

3.1 対象としたゲストハウスの特徴

オーナーへの聞き取り調査をもとに、対象としたゲストハウスの概要について述べる(表3-1-1)。

① 限界集落になりつつある山村の農家の事例（ゲストハウスK）

ゲストハウスKは、長野県北安曇郡小谷村の中土地区に立地している。オーナーのTさんは、小学生の頃、小谷村に山村留学をし、この村の素晴らしさに魅了され、自分のふるさとだと考えるようになった。そして2008年に、空き家となっていた築約150年の地域の農家を購入、大阪から小谷村へIターンし、限界集落となりつつある村を残したい、未来に繋げたいとの思いから、2011年にゲストハウスKを開業した。Tさんは他の仕事との兼業であるため、日頃の運営はスタッフが行っている。

建物は、この地域でもひととき大きい農家である。1階を宿として使っており、台所や居間などの共用空間と客室（和室のドミトリー2室・和室の個室1室）がある。ドミトリーの寝具は布団、個人スペースのカーテンなどはなく、プライバシーは望めないが、むしろ、こういった雑魚寝形式から生じる人と人との繋がりを重視している。ドミトリー価格は1泊4600円と高めであるが、これは周囲に飲食店などがいないことから、朝夕の食材費込の価格となっているためである。スタッフと宿泊者で共同調理を行い、寝具の準備や食事の準備なども各自で行うなど、宿泊者をお客様扱いしない方針の宿である。国内からの宿泊者が主で、リピーターも多い。

② 過疎化が進む山村集落の農家の事例（ゲストハウスH）

ゲストハウスHは、全6軒、人口11人、岐阜県美濃市の秘境と呼ばれる桶ヶ洞集落に立地している。なお、美濃市中心地からは、車で10数分の位置にあり、アクセスは、比較的容易である。

オーナーのUさんは、カヤックに魅せられて長良川に出会い、長良川沿いで仕事とカヤックを両立したいと考え、宿の経営を思い立った。宿にふさわしい建物を探していたところ、20年来空き家だった築約60年の農家と出会い、これを借り受け、2008年に宿を開業するに至った。

宿は、共用空間と個室3室（和室・布団）から成り、共用空間である板敷の居間は、昼

古民家ゲストハウスにおける宿泊者の行動と会話内容

表3-1-1 対象ゲストハウスの概要

	K	H	I	T	J	Y	M	D
立地	長野県小谷村	岐阜県美濃市	岐阜県飛騨市	三重県関市	神奈川県鎌倉市	奈良県奈良市	長野県下諏訪町	長野県松本市
地域種別	山村集落 (限界集落の可能性大)	山村集落 (都市中心部から比較的近い)	城下町近傍	宿場町	歴史観光都市 (商店街近傍)	歴史観光都市 (交通至便)	宿場町	城下町
建物種別	農家	農家	農家型邸宅の離れ (母屋の囲炉裏・釜戸利用可)	町家	戸建	戸建	他建築 (元旅館)	他建築 (元味噌蔵)
築年数	約150年	65年	80年	120年以上	89年	85年以上	106年以上	100年
開業年	2011年	2008年	2014年	2009年	2011年	2010年	2014年	2013年
開業趣旨	村を未来に繋げた いい	カヤックしながら 仕事したい	地域貢献	バイクや自転車旅 の人の宿	持続可能な社会つ くり	バックパッカー経 験を活かす	人々の交流促進、 地域の魅力発信	みんなの秘密基地、 旅人の灯台
宿泊室	ドミトリ-2, 個室1	個室3(繁忙期相部屋あり)	ドミトリ-3	ドミトリ-3	ドミトリ-1, 個室2	ドミトリ-2, 個室1	ドミトリ-2, 個室2	ドミトリ-2
ドミトリ-寝具	布団	布団	布団	布団	ベッド	ベッド	ベッド	ベッド
ドミトリ-価格	4600円	3800円(個室も同じ)	3000円	3500円	3500円	2400円	2900円	2750円
食事選択	(朝夕食材費込)	朝夕選択可	なし	なし	朝食選択可	なし	朝食選択可	なし
カフェ等の有無	なし	あり(調査当時休業中)	なし(母屋にあり)	なし	あり	あり	あり	なし
主な宿泊者年代	20~30代	幅広い	若い人	幅広い	日本から:20~30代 海外から:20~50代	幅広い	20~30代	20~30代
宿泊者国内外	国内が主	国内が多い	国内外半々	国内が主	国内外半々	海外が主	国内が主	国内外
オーナー移住等	Iターン	Iターン	Uターン	Iターン	Iターン	海外が主	地元	地元
オーナー年代	20代	50代	30代	30代	40代	30代	20代	20代, 50代
自宅兼用か宿専 用か	自宅兼用	自宅兼用	宿専用	自宅兼用	宿専用	宿専用	自宅兼用	自宅兼用
経営形態	個人	個人	2人で共同	家族	個人	家族	個人	2人で共同
専業・兼業	兼業	専業	兼業	専業	専業	専業	専業	専業
常駐スタッフ	あり	なし	あり	なし	あり	あり	あり	あり
地域活動	あり	あり	あり	あり	あり	あまりなし	あり	あり
調査時期	2015年4月	2015年7月	2015年2月	2015年2月, 7月	2015年2月	2015年2月	2015年4月	2015年4月

間はカフェとしても利用され（調査当時休業中）、宿とカフェのオープン以来、年間、約3000人もの方が訪れるようになった。素泊まり3800円、2食付き6500円、朝食付き4500円である。昔ながらの空間で、「のんびりとした時間を過ごす」「わくわくする自然体験」などを宿のコンセプトにしており、古民家での暮らしはもとより、薪風呂や釜戸炊きご飯などが体験できる。食事を選択する宿泊者がほとんどで、個室を原則とするなど、民宿的な宿といえるが、個人単位の料金設定や、セルフサービスなどの点では、ゲストハウスの特徴を有している。

③ 観光地近傍の農家型邸宅の離れを用いた事例（ゲストハウスI）

ゲストハウスIは、飛騨高山から車で30分弱、城下町飛騨古川の中心部近傍に立地している。飛騨古川は、出格子の商家や土蔵が続く美しい町並みを有しているが、こういった地域資源を必ずしも活用できずに、人口流出や高齢化が進んでいる。地元を離れていたHさんとSさんは、地域の衰退を憂い、地元に戻って事業を起こすことが一番の地域貢献であると考え、ともにUターンすることとした。こういった中、空き家となって荒れていた築140年以上の名士の邸宅が、見学や食事ができる施設として利用されることになった。この邸宅の庭の再生を手掛けた庭師のHさんと、友人のSさんが協力して、邸宅の数寄屋風離れを借り、ゲストハウスIを2014年に開業した。宿泊者は、希望すれば、邸宅の釜戸や囲炉裏などを使うことができる。離れに隣接する蔵は、宿のギャラリーとして使われており、若手アーティストの作品展示の場となっている。HさんとSさんは他の仕事との兼業であるため、日頃の運営はスタッフが行っている。

離れ全体が宿として使われており、台所・食事室・居間が一体となった共用空間とドミトリー3室（和室・布団）がある。共用空間には、人々が集える大きなテーブルが置かれ、活用されている。ドミトリー価格は1泊3000円である。インバウンドも重視しており、海外からの宿泊者も多い。

④ 宿場町の町家を用いた事例（ゲストハウスT）

ゲストハウスTは、三重県亀山市の関宿に立地している。関宿は、江戸後期から明治期に建てられた町家が200軒あまり軒を連ね、東海道で唯一、当時のおもかげを残す宿場町として、貴重な歴史的価値を有し、重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。

オーナーのTさんは、会社勤めや、沖縄での観光業を経たのち、伝統的な建物に住んで宿を開業したいと考え、建物を探そうと全国を旅していたところ、関宿と、この町家に出会った。よく知られた宿場町でありながら、観光地化されておらず、静かな普段の暮らしが息づく様子が魅せられ、Iターンし、バイクや自転車などで全国を旅する人々にふさわしい「旅人の宿」を、2009年に夫婦で開業した。

建物は、少なくとも築120年以上、おそらく江戸後期から明治初期に建てられたものと考えられる。町家2軒分が1軒として使われており、母屋、広い庭、離れ、蔵2棟があり、大きな住まいである。ゲストハウス開業にあたり、若干の改装はしてあるが、建具や箱階段、かまど等々、ほとんど当時のままである。台所や居間、離れなどの共用空間と、ドミトリー3室（和室・布団）があり、ドミトリー価格は1泊3500円、寝袋持参であれば2500円である。また、宿の仕事（片付け、掃除、庭手入れなど）を手伝えれば、時間に応じて宿泊費が軽減もしくは無料になる「丁稚くん」システムも設けられている。スタッフはいないが、丁稚くんシステムがオーナーの助けとなっている。国内からの宿泊者が主

で、リピーターも多い。

⑤ 歴史的都市の戸建て住宅を用いた事例（ゲストハウス J, Y）

ゲストハウス J, Yともに、都市部に残る希少な戸建の建物である。ゲストハウス Jは、鎌倉市内の、かつて港町として栄えた材木座に立地している。オーナーのMさんは、大学卒業後、ネパールでボランティア教師として活動後、世界一周をめざして約3年の旅をした。帰国後、持続可能な社会づくりに貢献したいとの考えから、トランジションタウン活動に加わり、その繋がりから、鎌倉市で築89年の戸建住宅と出会い、地元の人の協力も得ながら2011年にゲストハウス Jを開業した。カフェのあるラウンジ（共用空間）と、ドミトリー1室（和室・2段ベッド）、個室2室（和室・布団）があり、ドミトリー価格は1泊3500円である。なお、他の宿にも共通するが、2段ベッド形式の場合は、各寝台ブースにカーテンを取り付けることができるので、布団形式に比べると、個人のスペースを確保しやすいことが特徴である。海外からの宿泊者が半数である。

ゲストハウス Yは、奈良市の鉄道駅近く、交通至便のところに立地している。オーナーのKさんは、バックパッカーとして30か国ほど旅をした後、バックパッカー経験を生かし、静かでほっとできるリーズナブルな宿を運営したいと考え、築約85年の戸建住宅を見つけ出し、2010年に、夫婦で開業するに至った。カフェのある共用空間と、ドミトリー2室（和室・2段ベッド）、個室1室（和室・布団）があり、ドミトリー価格は1泊2900円である。古都奈良の観光に好適であることから、海外からの宿泊者が8割を占め、リピーターも多い。

⑥ 住宅以外の建築（和風旅館と蔵）を用いた事例（ゲストハウス M, D）

ゲストハウス Mは、長野県諏訪郡下諏訪町に立地している。下諏訪町は、中山道と甲州街道の合流地で、温泉宿が多い宿場町として栄えてきたが、年々観光客は減少し、高齢化が進んでいる。こういう状況を憂えた地元出身の若い女性Sさんが、明治期の古地図にも記載されている築106年以上の元老舗旅館を用い、和風建築の風情を残しつつ、デザイナーによる現代的意匠も取り入れ、ゲストハウス Mを2014年に開業した。地域の人も立ち寄れるようにと、バーも併設している。台所や居間、バーなどの共用空間と、ドミトリー2室（板間・2段ベッド）、個室2室（和室・布団、板間・ベッド）があり、ドミトリー価格は1泊2900円である。

ゲストハウス Dは、松本城を中心とする旧城下町である長野県松本市に立地している。駅から松本城までは観光客も多く賑わっているが、城の北側の地区は、伝統的な味噌蔵など味わいのある建物が多く残されているにもかかわらず、なかなか足を運んでもらえない状況にある。こういった中、地域を活性化したいと考えた地元の若い女性Kさんと知人のIさんが、築100年以上の元味噌蔵の蔵造りを生かし、ゲストハウス Dを2013年に開業した。台所や居間などの共用空間と、ドミトリー3室（板間・2段ベッド、板間・布団）があり、ドミトリー価格は1泊2750円である。海外からの宿泊者も多い。

3.2 宿泊者の行動と会話内容

各宿で実施した行動観察調査をもとに、宿泊者の行動と会話内容の結果を示し、それらの特徴を考察する。表3-2-1は、調査を行った日数、延べ宿泊者数、宿泊者の属性などの基本事項を、宿別に一覧したものである。

表3-2-1 宿泊者等の概要

(単位：人)

宿名	泊数	宿泊者		年代			国内外の別		連泊者	グループ宿泊		リピーター	来訪者	オーナー スタッフ	
		男	女	20～30代	40代～	その他	国内	国外		人数	内訳				
K	4泊	57	30	27	45	9	3	57		51	27	5, 4×3, 2×5	5		8
H	4泊	30	15	15	8	20	2	29		4	23	10, 7, 4, 2	12	3	8
I	6泊	42	20	22	36	5	1	36	6	8	21	5, 3×2, 2×5	4	8	19
T	3泊	26	19	7	24	2		25	1	12	4	2×2	9		5
	1泊	20	16	4	20			20		4			16	5	2
J	5泊	39	6	33	37	1	1	34	5	4	27	4, 3, 2×10	2	1	10
Y	2泊	30	12	18	27	3		16	14	10	16	3×2, 2×5	7		2
M	3泊	36	21	15	33	3		36		8	22	6, 2×8	7	23	19
D	3泊	41	20	21	41			38	3	4	11	4, 3, 2×2	5	10	6
計	31泊	321	159	162	271	43	7	292	29	105	151		67	50	79

* Tの1泊欄は、8月22日花火大会の日の数値

3.2.1 宿泊者等の概要

まずは、宿泊者の概要について述べる。

男女の比率では、概ね偏りはないが、Tでは、自転車やバイクなどで各地を旅する男性宿泊者が多く、Jでは、鎌倉観光の女性宿泊者が多いことが特徴である。年代では、20代から30代がほとんどであるが、Hは、家族連れや、カヤックを楽しむ中年の団体が来ることなどから年代が高くなっている。

宿泊者の国内外の別をみると、オーナーへの聞き取り調査にもあるように、K、H、T、Mでは国内からの宿泊者が主であり、I、J、Y、Dでは国外からの宿泊者も混在する結果であった。全般に、国内からの宿泊者が多い結果となっているが、これは、日本の夏期休暇期間や秋の連休など、国内からの宿泊者が多い時期に調査を実施したためと考えられる。

宿泊者同士の交流に影響を与える可能性が予測される連泊者、家族やグループでの宿泊者、再宿泊者（リピーター）がどの程度あるかをみてる。まず連泊者であるが、Kは、ほとんどが連泊者である。観光地ではなく山村集落に立地していることから、宿に連泊してゆっくり過ごすこと自体を目的とする人が多いためである。Tも、連泊者が多く、旅好きな人が、旅の途中で、オーナー家族とともに、ゆっくり過ごしている。KとTは、大きな農家と町家であるため、昼間も、建物内や庭などで思い思いに過ごしやすさも影響していると考えられる。Yも連泊者が多い。古都奈良の観光に複数日を費やす人が多いからではないかと考えられる。

リピーターも、H、T、Y、Mで3分の1程度ある。Tは、オーナー調査では、普段からリピーターが多く、特に、地域の祭りなどには大勢集まるとのことであったが、観察調査中の8月22日は、地域の花火大会であったことから、リピーターが16人来訪し、庭でのBBQパーティーを行い、花火大会にも参加していた。なお、この日は花火大会に出かけたため、会話内容を記録できなかったため、表3-2-1では「1泊」として別に示している。Kも、オーナー調査では、リピーターが多いとのことであったが、今回の観察調査では、十分把握することができなかった。夏期や秋の休暇期間であったため、初めての宿泊者が多かったのではないかと推察される。

次に、地域の人など宿泊外の来訪者をみると、最も多いのがMである。Mには、宿のラウンジに、誰でも立ち寄れるバーが開設されており、夕方以降には、宿泊者のみならず、近隣の人や日帰りできる人が集まり、様々な交流が生まれている。次に多いのがDとIである。Dでは、調査日に、週1回の「一品持ち寄り食事会」が行われており、地域の人参加していた。また、Iでは、シェアハウスも別途運営しており、そちらの住人が加わることもあることや、オーナーおよびオーナーの友人知人が訪れるなど、様々な人たちが、宿泊者と飲食をともにしながら交流している。M、D、Iに共通する点は、オーナーが地元出身者であることで、地元の友人知人や地域の人が集りやすい状況にあると考えられる。

オーナー及びスタッフは、MとIで多い。Mでは、宿とバーの両方の運営スタッフが含まれているためであり、Iでは、夕食事に、オーナー2人、常駐スタッフ1人、ヘルパー1人が加わる人が多いためである。

3.2.2 宿別の特徴

次に、宿別の特徴について述べる。

① ゲストハウスK

当宿は、ふとんによる雑魚寝形式であり、就寝までに宿泊者が仲良くなることを重視している。この点が、宿での典型的な行動の流れに反映されている。チェックイン→希望者全員による温泉→夕食の準備→夕食と飲酒・交流→就寝というように、就寝の頃には宿泊者が親しくなれる流れである。さらに朝には、近くの池の畔へピクニックに出かけ、昼間も、一緒に遊びに出かけたり、チェックアウト後の宿泊者と、連泊者やスタッフとで昼食に出かけるなどの光景もみられる。連泊者が多いことから、こういった過ごし方が、連泊で慣れた人から、1泊目の人へと受け継がれているといえる。

観察を行った4泊6日の行動(104回チェック)を集計した結果では、「会話」が圧倒的に多く、88件であった(図3-2-1)。連泊者が多い日は、特に交流が盛んであり、グループによる宿泊であっても、宿泊者とスタッフ全員で共通の話題による会話がなされていた。採取した全会話161件中、「日常的話題」25件、「旅の話」など旅関連23件、「作った料理」など料理関連15件であった。この他に、「家族」17件、「仕事」16件、「生き方・人生観」15件、「趣味」11件なども多く、会話が多岐にわたっていることが特徴である(図3-2-2)。

② ゲストハウスH

個室を原則とし、家族やグループ利用が多く、ほとんどの宿泊者が朝夕2食を選択するHでは、朝夕の食事時に、家族やグループを越えての交流が生まれることが特徴である。食事時以外は、一人で訪れた宿泊者は、居間、客室、縁側などで、静かにくつろぐことが多く、グループの宿泊者は、カヤック体験や温泉行きなど、それぞれの目的にあった過ごし方をしている。宿泊者の典型的な一連の行動の流れは、チェックイン→希望者全員による夕食と飲酒・交流→希望者は薪風呂→就寝→希望者全員による朝食である。

観察を行った4泊7日の行動(71回チェック)を集計した結果では、「会話」が圧倒的に多く、48件であった(図3-2-3)。次いで、「食事」が16件、「飲酒」が13件など飲食関連であった。採取した全会話130件中、「日常的話題」が44件と最も多かった(図3-2-4)。次いで、「生き方・人生観」17件、「仕事」「趣味」8件、「学業」7件など、広い意味での生き方に関する話題が32件、「旅の予定・目的」10件、「旅の話」6件、「各地のゲスト

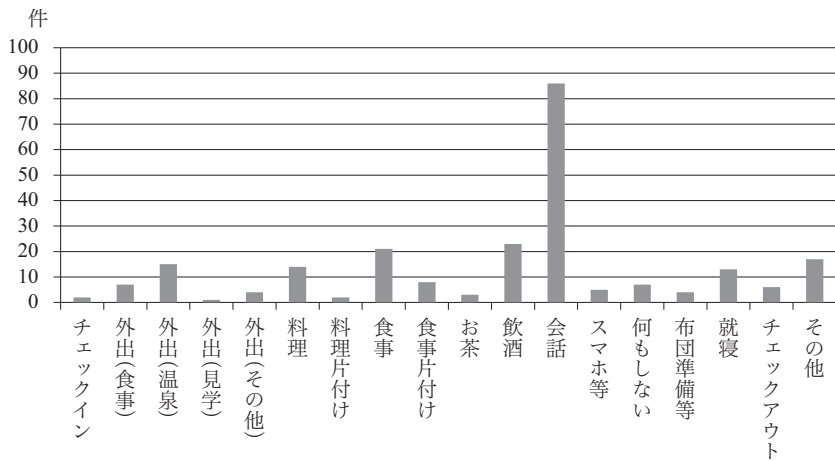


図3-2-1 宿泊者の行動——ゲストハウスK

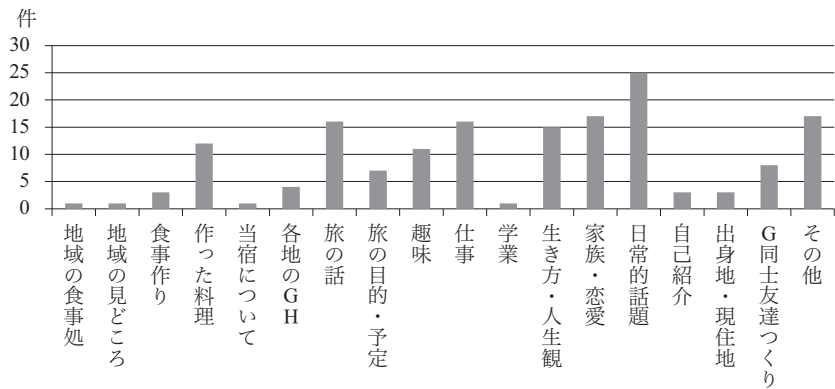


図3-2-2 宿泊者の会話内容——ゲストハウスK

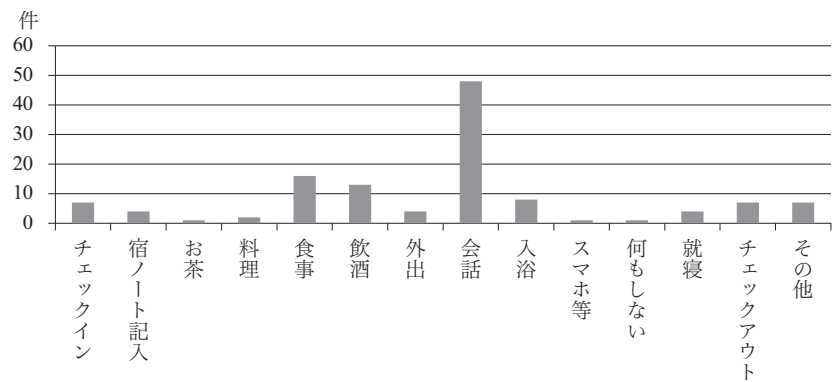


図3-2-3 宿泊者の行動——ゲストハウスH

古民家ゲストハウスにおける宿泊者の行動と会話内容

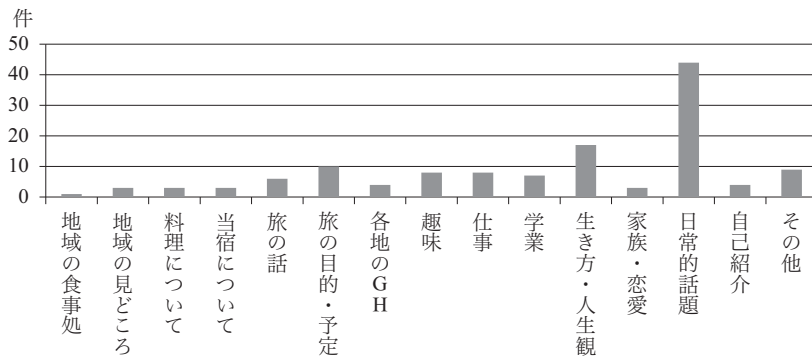


図3-2-4 宿泊者の会話内容——ゲストハウスH

ハウス」4件、「当宿」3件など、旅関連の話題が23件などであった。概ね、初対面の人が交わすような日常会話を中心であるが、人生や旅関連の話題もあることがわかった。

③ ゲストハウスI

夕食時の多彩な交流が特徴の宿である。希望する宿泊者とスタッフが、夕食材料を一緒に買いに行き、スタッフが食事を作る傍らで、宿泊者は、手伝うあるいは交流していることが多い。オーナーや、オーナーの地元の友人知人、シェアハウスの住人などが夕食に加わることも多く、宿が、宿泊者をはじめ、様々な人の集いの場になっている。昼間は、オーナーと宿泊者が一緒に周辺観光に出かけることもある。宿泊者の典型的な行動の流れは、チェックイン→希望者は食材の買い物→夕食の準備・手伝い（調理は主にスタッフ）・交流→夕食と飲酒・交流→シャワー→就寝→翌朝チェックアウトまたは個々に行動、などである。

観察を行った6泊9日の行動（159回チェック）を集計した結果では、「会話」が80件と最も多く、次いで、「飲酒」40件、「食事」35件、「料理」26件など、飲食に関する行動が多かった（図3-2-5）。会話の様子では、みんなで共通の話題について話すことが多く、採取した全会話246件中、「出身地・現住地」21件、「自己紹介」13件などの他に、「旅の話」19件、「当宿」15件、「旅の目的・予定」11件、「各地のゲストハウス」11件など、旅の話も多く、「家族・恋愛」22件、「仕事」22件、「学業」17件など、会話が多岐にわたっていることが特徴である（図3-2-6）。

④ ゲストハウスT

徒歩、自転車、バイクなどで旅を続けている宿泊者が多い宿である。連泊者も多く、昼間も、オーナーと宿泊者が一緒に、庭で流しそうめんをする、川遊びに出かけるなど、連泊して楽しんでいる様子が伺えた。リピーターも多く、地域の祭りなどの折には、大勢集まり、母屋、離れ、庭などの全体が活用されている。町家2軒分が1軒として使われており、隣の町家は保存建物であるため住人はおらず、庭の奥には蔵があるなど、周辺への音漏れを気にせずに集える立地状況にある。

宿泊者の典型的な行動の流れは、チェックイン→夕食内容を宿泊者が相談して決める→食材を宿泊者が買い出しに行く→宿泊者同士で協力して夕食を作る→夕食→飲酒・交流である。夕食の準備や食事を共にすることで宿泊者が仲よくなり、チェックアウトする宿泊

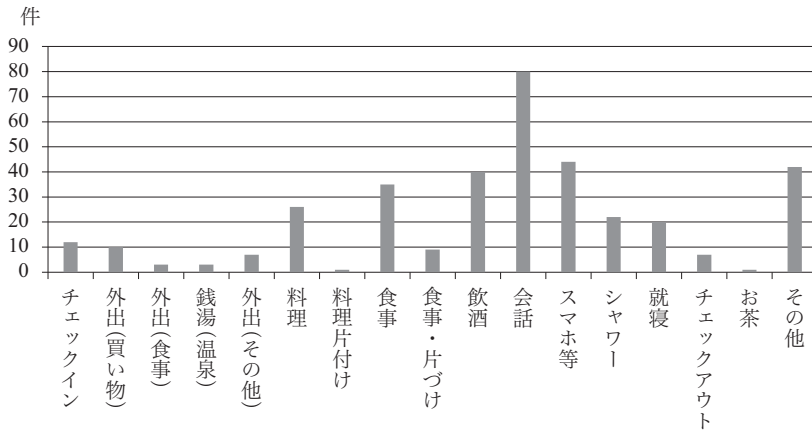


図3-2-5 宿泊者の行動——ゲストハウス I

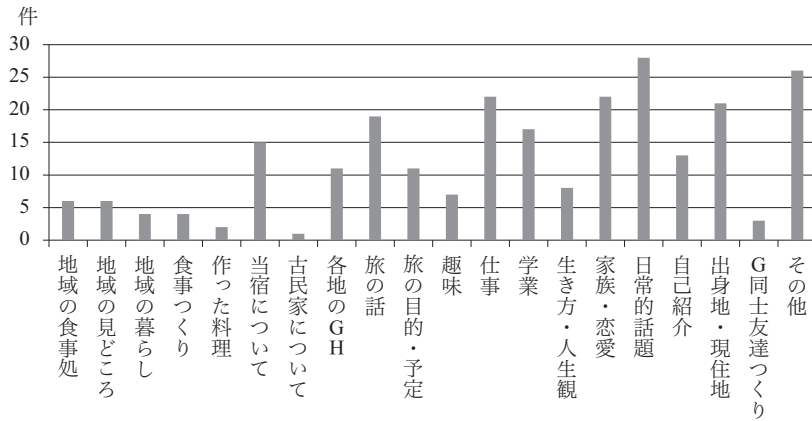


図3-2-6 宿泊者の会話内容——ゲストハウス I

者を、他の宿泊者が見送る光景も見られる。

観察を行った3泊5日の行動(57回チェック)を集計した結果では、「会話」が圧倒的に多く49件であり、次いで「飲酒」が18件であった(図3-2-7)。採取した全会話84件中、「旅の話」14件、「当宿について」10件、「各地のゲストハウス」7件など、旅に関する話題が多かった(図3-2-8)。宿泊者の多くが旅好きな人であるため、食事や飲酒などの折に、様々な旅の話が交わされていることがわかる。

⑤ゲストハウス J, Y

ゲストハウス J は、観光を主目的とする女性の宿泊者が多い宿である。夕食はほとんどの人が外食で、会話や交流はあまりない。2段ベッドにはカーテンが付いており、カーテンを閉めて、個人スペースで過ごす人が多くみられた。朝食を選択する人が多いので、朝食時には会話が生み出されている。宿泊者の典型的な行動の流れは、チェックイン→客室(スマートフォンなどの使用)→シャワー→就寝→希望者による朝食→チェックアウトである。

古民家ゲストハウスにおける宿泊者の行動と会話内容

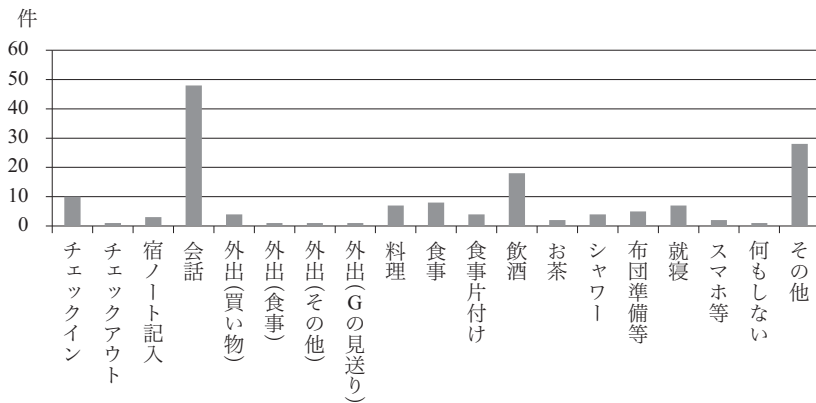


図3-2-7 宿泊者の行動——ゲストハウス T

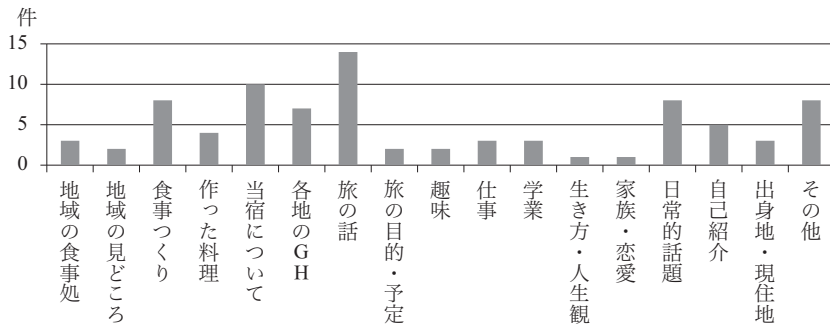


図3-2-8 宿泊者の会話内容——ゲストハウス T

観察を行った5泊8日の行動(81回チェック)の集計結果でも、「会話」74件に次いで、「ベッドに居る」が73件と多い結果であった(図3-2-9)。観光地であることから、採取した全会話103件中、「旅の話」「地域の見どころ」など旅に関する話題が37件と多かった(図3-2-10)。

ゲストハウスYは、観光を主目的とする国内外からの宿泊者が多い宿である。ゲスト同士の会話はあまりないが、国内からの宿泊者はリピーターが多く、オーナーとの会話もみられるなど、宿泊者とオーナーとのつながりが特徴である。台所を使う人はなく、外食か、買ってきたものを食べるかしている。宿泊者の典型的な行動の流れは、遅めのチェックイン→居間で一人ゆっくり or オーナーや同行者と会話→シャワー→就寝である。宿泊者との交流よりも、一人でゆったりとした時間を過ごす人が多く、オーナー自身もそのような雰囲気重視しているとのことであった。

観察を行った2泊3日の行動(42回チェック)を集計した結果でも、「スマホ」95件と「会話」94件が多かった(図3-2-11)。チェック回数よりも行動数が多いのは、個別行動が行われているためである。採取した全会話94件中、「日常的话题」が37件と最も多く、「地域の見どころ」20件、「当宿について」16件など、旅に関する話題も多い結果であった(図3-2-12)。

松原 小夜子

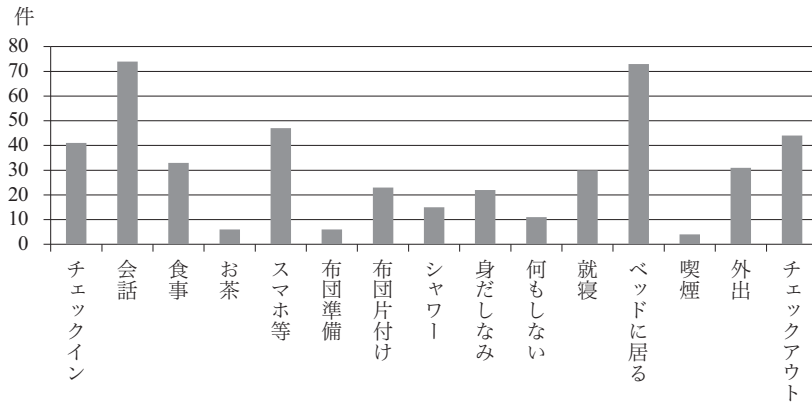


図3-2-9 宿泊者の行動——ゲストハウス J

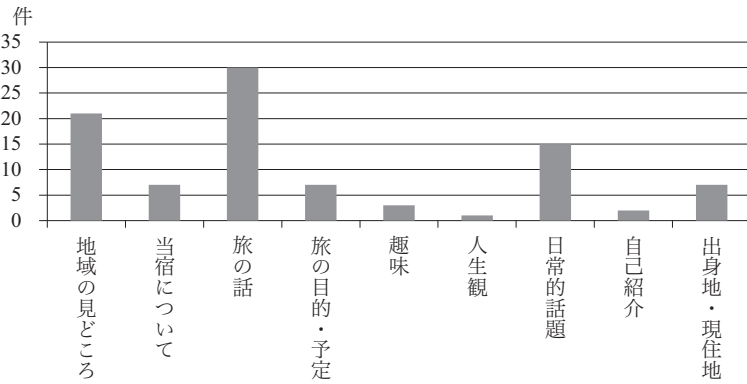


図3-2-10 宿泊者の会話内容——ゲストハウス J

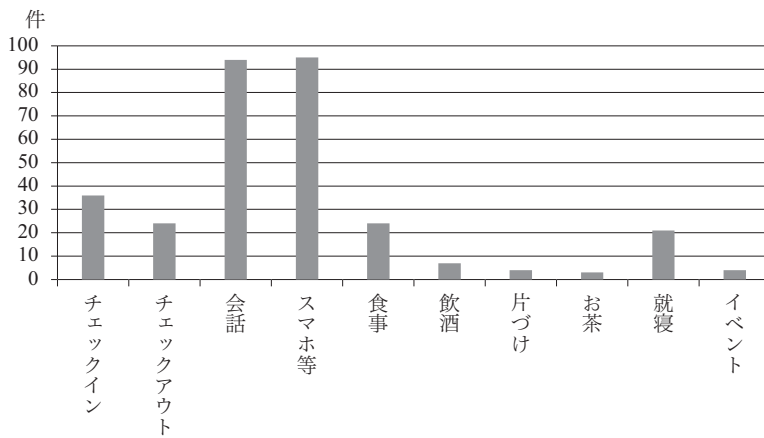


図3-2-11 宿泊者の行動——ゲストハウス Y

古民家ゲストハウスにおける宿泊者の行動と会話内容

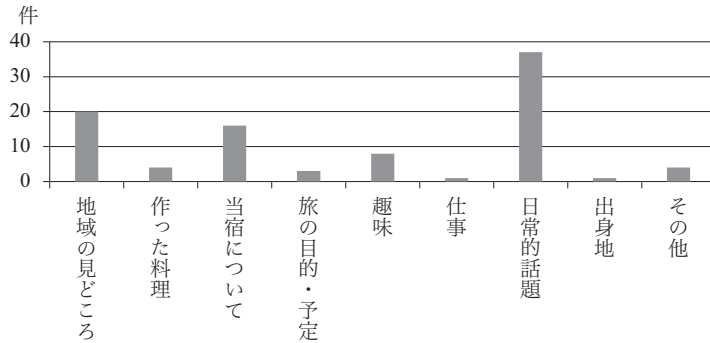


図3-2-12 宿泊者の会話内容——ゲストハウスY

⑤ ゲストハウスM, D

ゲストハウスMは、居間の一角にバーがあり、外食を済ませた宿泊者や、地域の人たちが集い、様々な交流が生まれている宿である。オーナーが地元出身であることも、地域の人々の来訪に影響していると考えられる。宿泊者の典型的な行動の流れは、チェックイン→銭湯・外食→帰宿→バーにて飲酒・交流→就寝→朝食→昼間は個々に行動である。

観察を行った3泊4日の行動(49回チェック)を集計した結果では、「会話」が最も多く57件、バーでの「飲酒」も47件と多かった(図3-2-13)。チェック回数よりも行動数が多いのは、行動の拠点が2つに分かれているためである。「スマホ・タブレット」も32件あった。採取した全会話99件のうち、「日常的な会話」10件の他に、「旅の話」9件、「旅の目的・予定」5件、「地域の見どころ」6件、「地域の食事処」5件など、旅に関する話題も多いことがわかる(図3-2-14)。また、「仕事」8件、「趣味」6件、「家族・恋愛など」6件、「生き方・人生観」4件など、話題が多岐にわたることが特徴である。

ゲストハウスDでは、玄関から客室にいたる経路に、大きな樽のテーブルが置かれているラウンジがあるため、ラウンジに人が集まりやすく、交流が生まれやすい間取りとなっているが、日によって、みんなで会話する日、観光などで遅い時間まで出掛ける人が多い日、個人で過ごす人が多い日など、さまざまである。典型的な1日の行動の流れは、

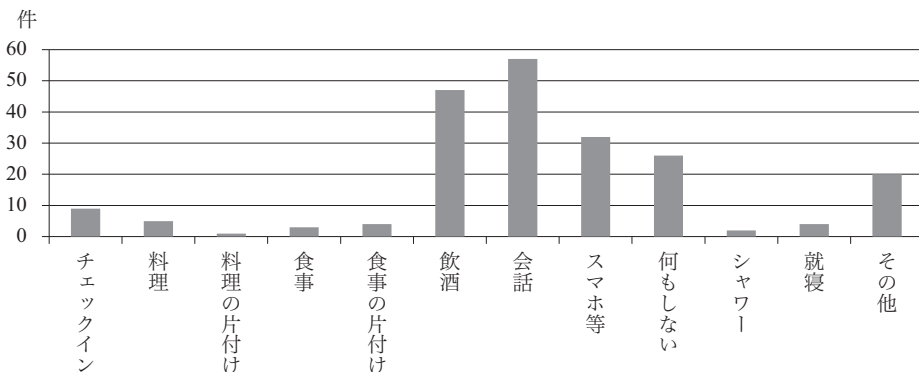


図3-2-13 宿泊者の行動——ゲストハウスM

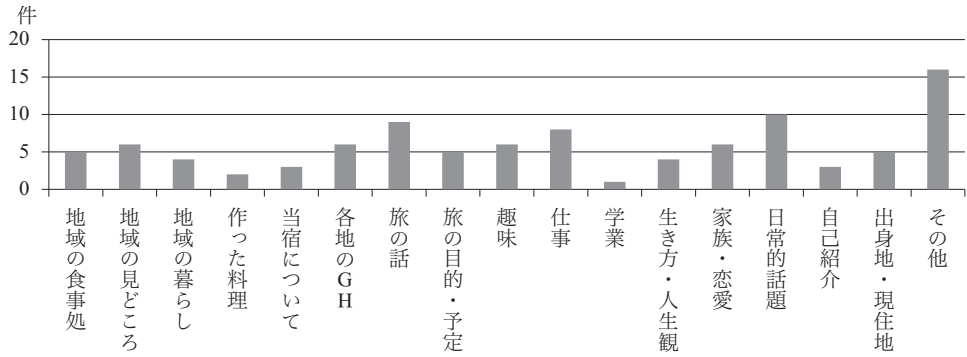


図3-2-14 宿泊者の会話内容——ゲストハウスM

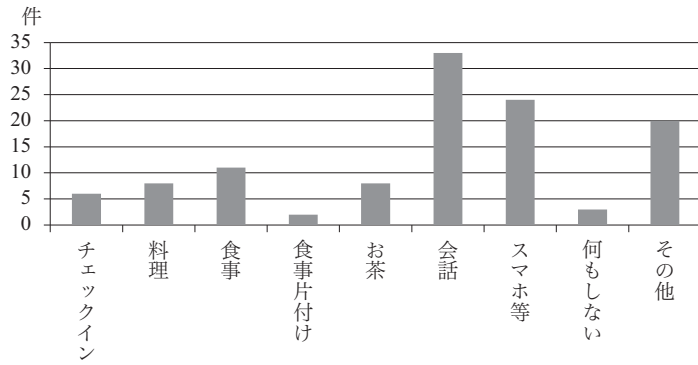


図3-2-15 宿泊者の行動——ゲストハウスD

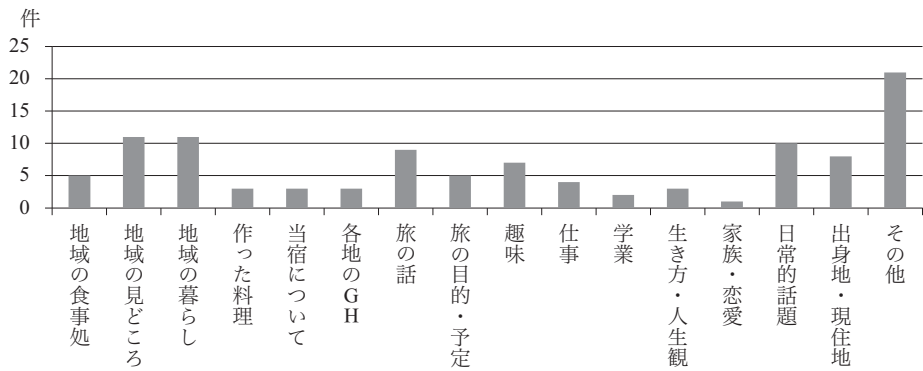


図3-2-16 宿泊者の会話内容——ゲストハウスD

チェックイン→銭湯・外食→帰宿→ラウンジにて交流→就寝→外で朝食→昼間は個々に行動である。

3泊4日の行動(45回チェック)を集計した結果では、「会話」が最も多く33件であった(図3-2-15)。採取した全会話106件中、「日常的话题」が10件と多いが、「地域の見どころ」11件、「地域の食事処」5件、「旅の話」9件、「旅の目的・予定」5件など、旅に関する話題も多い(図3-2-16)。

3.3 各種交流の実態と宿泊者の意識

各宿において実施した宿泊者へのアンケート調査をもとに、宿泊者同士あるいは地域の人々との交流の実態とそれらへの意識についての結果を示し、考察を行う。なお、建物形態や立地状況が類似しているJとY、MとDをひとくくりにして結果を示している。なお、以下の文中および図表では、J&Y、M&Dと表記する。

回答者の属性をみると、性別では、252人中、男性125人、女性127人とほぼ同数であった。年代では、20代が最も多く45.2%、30代が29%であり、両者で74.2%を占めた。なお、Iでは、30代が42.6%と最も多く、次いで40代が26.5%であるなど年代が高い傾向にあり、民宿的な特徴を反映していると考えられる。職業等の属性では、社会人が78.4%と8割を占め、次いで学生が13.9%であった。

今回の宿泊数では、全体としては、1泊が61.8%と多い。宿別にみると、HとIでは、1泊が多く、75.7%と85.7%を占め、逆に、Kでは、2泊以上の連泊者が64.4%である(図3-3-1)。宿の利用回数では、全体として「はじめて」が半数以上の57.8%である(図3-3-2)。宿別にみると、2014年8月開業のIでは「はじめて」が85.7%と多く、開業からの年月が浅いことによる影響もあると考えられる。逆にTでは、「2回以上」のリピーターが57.8%と多く、「5回以上」のリピーターも、Tで37.8%、Kで28.8%、Hで21.1%あった。これらの結果は、概ね、観察調査の結果と符合している。

次に、各種の交流について、他の宿泊者と交流があったか否かを「あった」から「なかった」までの4段階で尋ねたところ、「あった」65.3%、「まああった」13.7%、両者合わせると79%であり、交流が活発であることがわかった(図3-3-3)。ただし、宿別にみると、観察調査結果でも示されたように、民宿的なHと、観光地の宿の要素が主であるJ&Yでは、相対的に交流が少なかった。

いつ交流したかを複数回答で尋ねた結果では、全体として、「居間などでのくつろぎ時」が80.3%と最も多く、次いで「夕食作りや夕食時」58.7%、「庭など屋外でのくつろぎ時」38%、「銭湯や温泉での入浴時」27.4%であった(図3-3-4)。観察調査の結果にもあるように、ゲストハウスに特徴的な共用空間が交流に活用されていること、また、宿泊者による食事作りや夕食も交流を促していることがわかる。なお、宿別にみると、共用空間での交流はいずれの宿でも多いが、宿の食事を選択できるHや、近隣で外食する人が多いJ&YとM&Dでは、相対的に少ない結果であった。他の宿泊者と交流してよかったかの問いには、82%が「よかった」と評価していることがわかった。

あまり交流できなかった人について、交流したかったかを尋ねたところ、「思う」が61.9%、「まあ思う」が19%であり、交流を望んでいる人が多いことがわかった(図3-3-5)。ただし、民宿的なHと、観光地のJ&Yでは、「思う」が45.5%と55.6%と他の宿に比

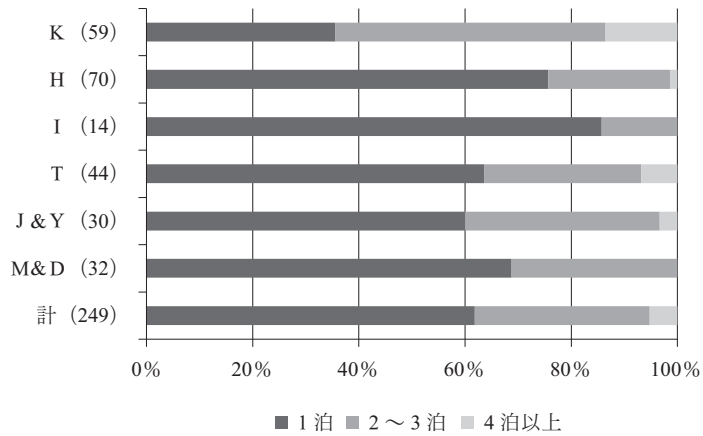


図3-3-1 今回の宿泊数

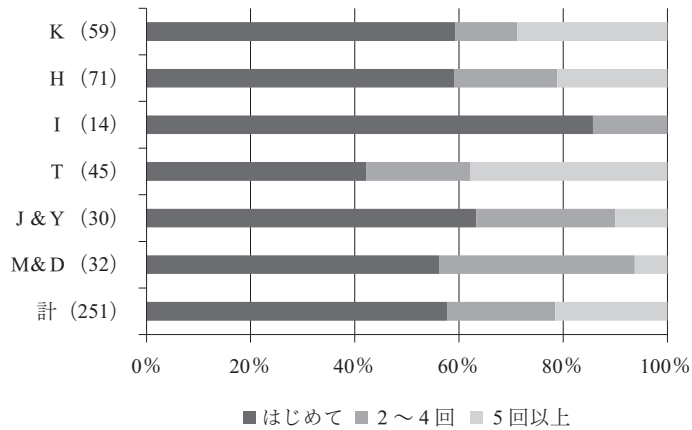


図3-3-2 当宿の利用回数

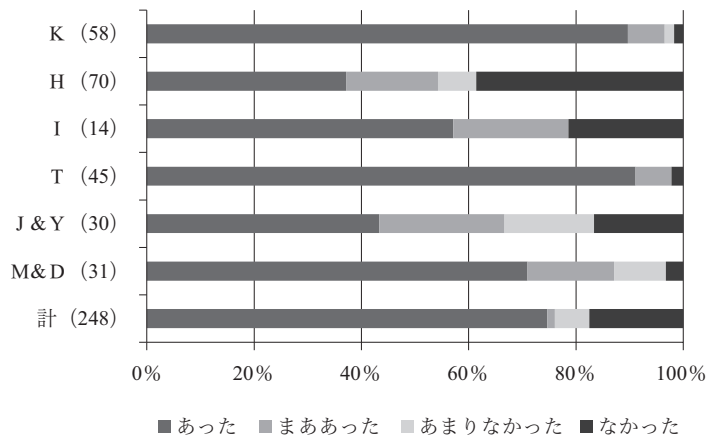


図3-3-3 宿泊者との交流の有無

古民家ゲストハウスにおける宿泊者の行動と会話内容

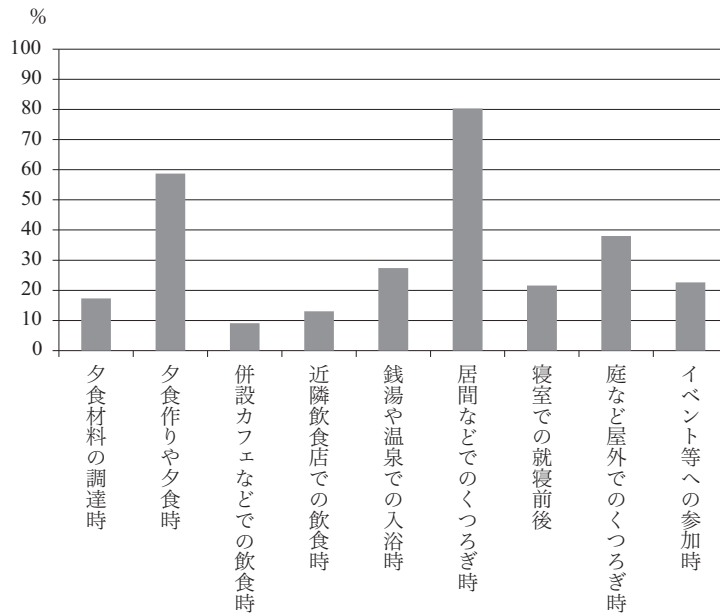


図3-3-4 宿泊者といつ交流したか

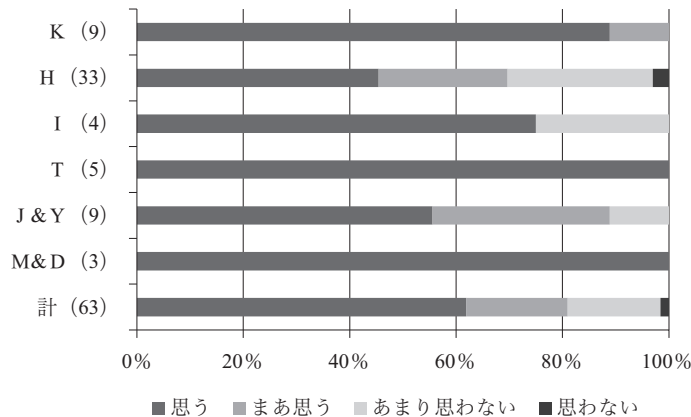


図3-3-5 宿泊者と交流したかったと思うか

べると少ない結果であり、両宿の特徴を表していると考えられる。

地域の人との交流があったかについても同様に尋ねたところ、「あった」25.6%、「まああった」11.8%であり、37.4%で何らかの交流があったことがわかる(図3-3-6)。観察調査結果にもあるように、オーナーが地元出身者であるM&DとIでは、オーナーの友人知人などが宿を訪れるなどして交流が生まれており、バーを設けて、地域の人々へ集いの場を提供しているMでは、80%が「あった」と回答している。いつ交流したかでは、「イベント等への参加時」が33.9%と多く、祭り等のイベントで交流が行われていることがわかる(図3-3-7)。また、「近隣飲食店での飲食時」25%、「銭湯や温泉での入浴時」24.1%で

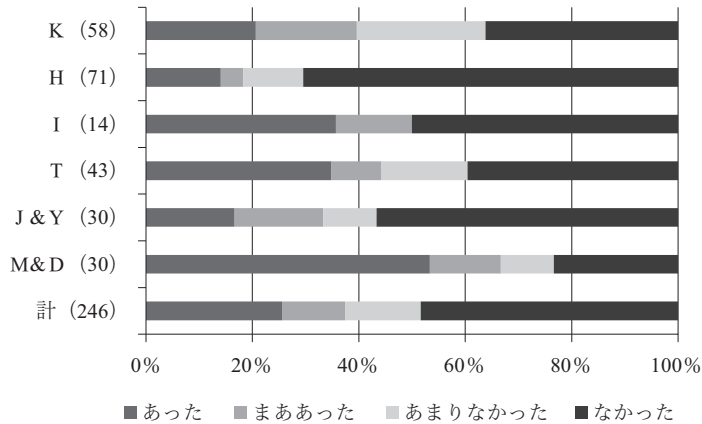


図3-3-6 地域の人との交流の有無

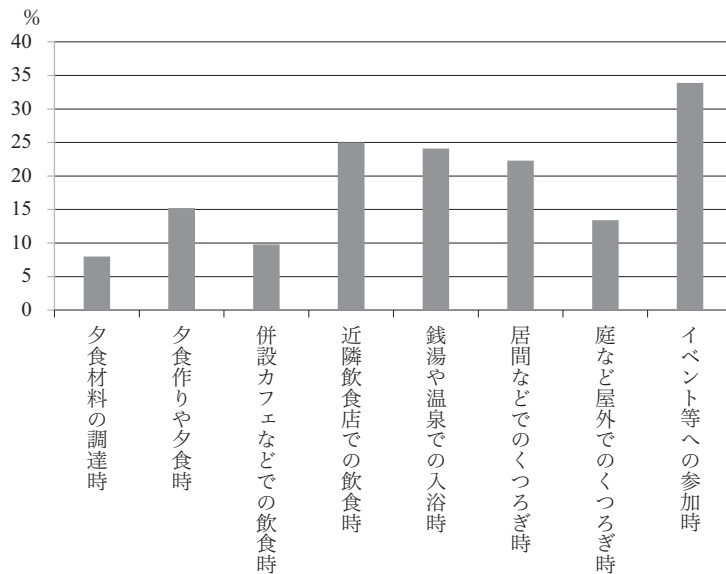


図3-3-7 地域の人といつ交流したか

あり、素泊まりで、入浴設備が簡易であることなどが、近隣の飲食店や銭湯利用など、地域との関わりを生んでいることがわかった。

宿泊者やオーナー・スタッフ、地域の人などと交流してよかったことでは、「地域の見どころ・食事処」などの観光情報の取得が各々2割～4割あることは、観光拠点としての宿らしい評価であるといえるが、加えて、「仲良くなれた」が61.5%、「いろいろな考え方と出会えた」が59.2%と多いことも注目される（図3-3-8）。観察調査の結果にもあったように、仕事や趣味、家族、悩み事など、様々な会話が交わされていることの反映であると考えられる。

古民家ゲストハウスにおける宿泊者の行動と会話内容

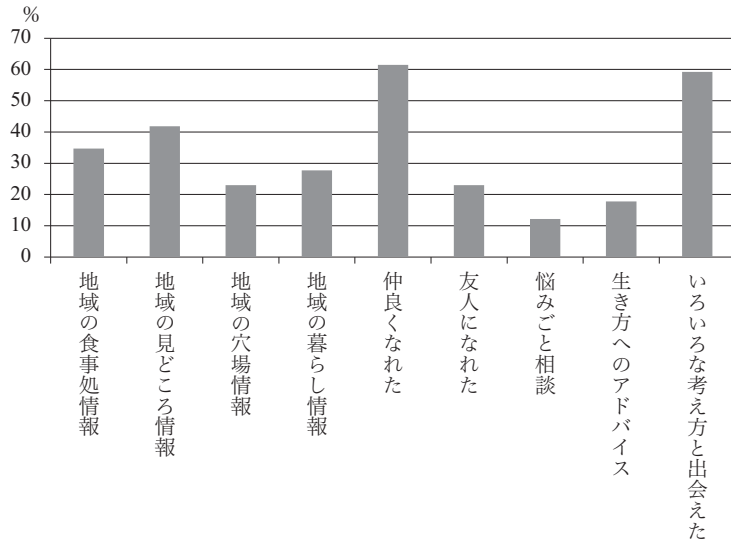


図3-3-8 宿泊者や地域の人と交流してよかったこと

3.4 交流状況に着目した宿の分類

宿泊者等の行動や会話内容を調べた結果、交流の状況は一律ではなく、宿の立地、オーナーの特性、食事形態などによって異なっていることがわかった。交流状況からみると、今回対象とした宿は、概ね、次の5つのタイプに分類することができる。

① 観光地ではない山村に立地する宿：観光地ではないことから、山村への訪問と、宿泊者との交流そのものが宿泊の目的となっている宿と考えられ、連泊、共同行動、共食などを通して多彩な交流が生まれていることが特徴である。会話内容でも、「日常的话题」や、「作った料理」「旅の話」の他に、「家族」「仕事」「人生観」「趣味」なども多く、会話が多岐にわたっている。

② 同じく山村に立地する民宿的な宿：家族やグループでの利用が多く、薪風呂、釜戸焚きご飯など昔ながらの暮らしを楽しめる宿であるが、朝夕の食事時に、家族等を越えた交流がみられることが特徴である。会話内容では、「日常的话题」が多いが、「人生観」「仕事」「趣味」などの生き方に関する話題や、「旅の話」など旅関連の会話も交わされている。

③ 宿場町に立地する宿：東海道の宿場町に立地し、バイクや自転車、徒歩等による旅好きの人々が集い、旅好きのオーナー家族とともに、夕食時（連泊の場合は朝食、昼食も含め）に、様々な旅の話などで交流していることが特徴である。

④ オーナーが地元出身者である宿：オーナーが地元出身であることから、夕食時や、夕食後の飲酒時に、オーナーの友人知人や地域の人々が宿を訪れ、宿泊者と地域の人との交流が生まれていることが特徴である。会話内容でも、「日常的话题」などの他に、「地域の見どころ」「地域の食事処」など、地域の話が多い。

⑤ 観光地の宿：交流よりも観光を主目的とする国内外からの宿泊者が多いことが特徴

である。2段ベッドに備えられたカーテンを閉め、個人のスペースで、ゆっくり時間を過ごす人が多い。朝食を選択できる宿では、朝食時に、「旅の話」「地域の見どころ」などの旅に関する会話が交わされている。

4. まとめ

古民家ゲストハウスを対象に、宿泊者等の交流状況に着目して、観察調査およびアンケート調査を行い、宿泊者の行動および会話内容を捉えた結果、宿の立地やオーナーの特性、食事などによって交流状況は異なり、①観光地ではない山村に立地する宿：宿泊者の多彩な交流の場、②同じく山村に立地する民宿的な宿：家族やグループを越えた交流の場、③宿場町に立地する宿：バイク等による旅好きの人々の交流の場、④オーナーが地元出身者である宿：宿泊者と地域の人との交流の場、⑤観光地の宿：交流よりも観光の拠点となっていることがわかった。

交流してよかったことへの回答として、「地域の見どころ・食事処」などの観光情報の取得に加えて、「仲良くなれた」「いろいろな考え方と出会えた」が多いことは、生き方や人生観、仕事や趣味、家族といった多彩な会話が交わされていることの反映であると考えられる。

謝辞 本研究の調査にご協力いただきました皆様に深く感謝申し上げます。

参考文献

- 林幸史, 藤原武 2015: 旅行者が交差する場としてのゲストハウス——交流型ツーリズムの社会心理学的研究, 関西学院大学社会学部紀要(120), 79-87
- 石川美澄 2012: 地域社会における小規模宿泊施設の役割に関する一考察——長野市善光寺門前のゲストハウスのイベントを事例として, 生活学論叢(20), 95-102
- 石川美澄, 山村高淑 2014: 国内における宿泊施設型ゲストハウスの経営と利用の実態に関する研究, 都市計画論文集49(2), 140-145
- 片桐由希子, 梶山桃子, 東秀紀 2015: 都市部の簡易宿所型ゲストハウスにおける交流機能に関する研究, 観光科学研究(8), 61-69
- 小林祐太, 森永良丙 2015: 地域に開かれた宿泊型ゲストハウスの実態と可能性に関する研究, 日本建築学会大会学術講演懇談集2015, 191-192
- 松原小夜子 2016: 都道府県別にみた宿泊型ゲストハウスの開業実態, 椋山女学園大学研究論集自然科学篇(47), 95-107
- 長田浩幸, 横山俊祐, 徳尾野徹 2015: 宿泊施設型ゲストハウスと地域との連関に関する研究, 日本建築学会大会学術講演懇談集2015, 911-912
- 澤田彩希, 岡絵理子 2012: 都市型短期滞在型ゲストハウスの地域まちづくりの可能性に関する一考察, 都市計画学会関西支部研究発表会2012